



インターンシップで実際にできることを確認 真面目に取り組む姿を見て安心して任せられました



代表の藤原秀旨さんは、キャベツ専業農家の父から20代で農家を引き継ぎ、年々規模を拡大。現在では約15haのほ場で、キャベツを主体にブロッコリー、水稻などを栽培しています。冬場に収穫期となるキャベツは7月に種から苗を作り、8月盆明け頃に定植しますが、猛暑の影響もあり水不足や雑草など、土の状態には特に気を遣っています。

最近では農作業を手伝ってもらうパートさんが集まりにくくなっていることと、農福連携を始めた神戸岩岡農産の淡野さんの取り

組みを知り、まずは畑の除草を頼めないかと、1日インターンシップを行いました。草刈り用の「三角ホー」を使って実演しながら説明しましたが、実際に体験してもらうとなかなかうまくいかないことが判明。結果、手作業での除草作業を委託することに。「みんなが一生涯懸命に作業する姿と、取った雑草もきれいに片付けられた畑を見て感動しました」と藤原さん。今後は収穫したブロッコリーの袋詰めなど、できることから委託内容をさらに増やしていきたいと考えています。

作業上の工夫点や報酬について

インターンシップで作業を実際に体験してもらうことにより、できること・できないことが明確になりました。支援員の指示のもと、全員が真面目に作業に取り組んでくれるので安心して任せられます。今後は人手が不足している耕作地周辺の溝掃除なども頼めるのではないかと考えています。除草作業の報酬は、10aあたりの単価を設定して出来高払いとしています。



代表の藤原秀旨さん

(2024年2月取材)